

全国鳥類繁殖分布調査

ニュースレター 創刊号

2015年6月1日



ササゴイ：内田 博

全国鳥類繁殖分布調査が始まります

1970年代と1990年代に行なわれた、環境省の鳥類繁殖分布調査。第3回目の調査が、NGOと環境省の共同事業として2020年の完成を目指して、今、スタートします。

1970年代と1990年代に環境省が全国で実施した鳥類繁殖分布調査。日本全国の鳥の分布図を描くために、日本野鳥の会を中心とした全国の約2,000人のバードウォッチャーの協力を得て実施されました。調査に参加され、当時のことを覚えている方も多いと思います。

全国の分布を明らかにすることは、観察者の多い一部の分類群以外では困難です。そのため、この調査の成果は、野生動物の全国的な分布とその変化をみることのできる数少ない情報として、現在も日本の生物多様性の評価のために使われています。また、モズ類やヨタカなどの若齢林に生息する鳥、シロチドリやコアジサシなどの裸地に生息する鳥などが減少していることがわかり、これらの鳥がレッドリストに掲載されることにもつながりました。

すでに前回の調査から20年が経とうとしています。近年もスズメの減少、外来種の拡大、藪にすむ鳥の減少など、鳥の生息状況に変化が起きており、全国の鳥の現状を明らかにする必要があります。これまでの調査は、環境省により行なわれてきましたが、次の調査を実施できる予算の目処はたっていません。

そこで、バードリサーチ、日本野鳥の会、日本自然保護協会、日本鳥類標識協会、環境省生物多様性センターの共同事業として、調査を実施することになりました。今年度を、調査員の募集や助成金の獲得といった調査体制の構

調査のスケジュール

	2015	2016	2017	2018	2019	2020
調査準備	←→					
現地調査		←→	←→	←→	←→	←→
アンケート		←→	←→	←→	←→	←→
とりまとめ						←→

築の年と位置付け、2016年度から2020年度で調査を実施していきます。

このたび、調査の状況やさまざまな情報を共有するため、「ニュースレター」を発刊することになりました。当面は年4回プラスアルファくらいの頻度で発行していきたいと思えます。ボランティアで運営をしていますので、ニュースレターは手間と費用のかからないPDFで発行していきます。そのためインターネットを使っていない方にはお届けすることができません。そのような方が周りにいらっしゃいましたら、プリントアウトして見せていただけたら幸いです。

(植田睦之:バードリサーチ)

調査協力登録のページ:

<http://www.bird-atlas.jp/volunteer.html>

過去の鳥類繁殖分布調査で わかった日本の鳥の状況

過去2回の鳥類繁殖分布調査の結果から、日本でいちばん分布の広い鳥はウグイスやヒヨドリ、開けた環境に生息する鳥が顕著に減少しており、外来鳥や大型の水鳥が増加していることがわかってきました。



チゴモズ：高橋ゆう

鳥類繁殖分布調査は第1回の調査が1974-1978年に、第2回の調査が1997-2002年に行なわれました。ここでは、それらの結果をもとに、日本の鳥の分布と変化についてみていきたいと思えます。

繁殖分布調査では、繁殖ランク別に調査結果がまとめられています。ランクは5つに分かれています。

- A 繁殖を確認した。
- B 繁殖の確認はできなかったが、繁殖の可能性がある。
- C 生息を確認したが、繁殖の可能性は、何ともいえない。
- D 姿・声を確認したが、繁殖の可能性は、おそらくない。
- E 生息は確認できなかったが、環境から推測して、繁殖期における生息が考えられる。

D は冬鳥や旅鳥が観察された例ですし、E は実際の分布ではありませんので、A～C を分布していたメッシュとして、以下、日本の鳥の分布をみてみます。

日本でいちばん分布の広い鳥は？

1990年代の調査で、A～C ランクのメッシュ数が一番多かった鳥はウグイスでした(表1)。ヒヨドリ、キジバト、シジュウカラがそれに続きました。これらは森の鳥で、小規模な緑地があれば、平野でも生息できます。日本の国土で優占するのは67%を占める森林です。そのため、この森林を生息地としていて、他の環境にも適応できる種がもっとも分布の広い種となるのでしょうか。分布の広い鳥として、思いつく種の1つにスズメがいます。しかし順位は10位で、それほど上位ではありませんでした。スズメは森の鳥ではないので、順位が低いのでしょうか。

ただ、1970年代の結果を見ると、少し状況が違います。

表1 過去の繁殖分布調査での記録メッシュ数上位10種

1997-2002年		1974-1978年	
種名	メッシュ数	種名	メッシュ数
1 ウグイス	1,155	ウグイス	1,062
2 ヒヨドリ	1,104	ホオジロ	1,035
3 キジバト	1,072	キジバト	1,022
4 シジュウカラ	1,049	ヒヨドリ	1,000
5 ハシブトガラス	1,036	シジュウカラ	995
6 ホオジロ	1,028	ハシボソガラス	932
7 カワラヒワ	983	スズメ	892
8 コゲラ	927	ハシブトガラス	888
9 ハシボソガラス	916	カワラヒワ	887
10 スズメ	873	モズ	838



日本でいちばん分布の広いウグイス(左：藤波不二雄)と1970年代と比べて順位の落ちたホオジロ(右：佐久川 望)

伐採地や低木林でよく見かけるホオジロが2位に入っています。また、ハシボソガラスの方がハシブトガラスよりも順位が高く、スズメが7位、モズが10位に入っているなど、開けた場所の鳥が多いのです。1970年代は森林伐採が多く、森林内にも開けた場所が多かったためなのかもしれません。次節に示すように、1970年代から1990年代にかけて開けた場所の鳥が減ってしまうくらい環境の変化があったのではないかと思います。



減少しているウズラ（渡辺美郎），アカモズ（内田 博），増加しているソウシチョウ（藤波不二雄），カワウ（上山義之），アオサギ（藤井 薫）

減った鳥 増えた鳥

1970年代1990年代のいずれかに20メッシュ以上の記録がある種について、増減率をみてみました。いちばん減った鳥はウズラ、続いてチゴモズとアカモズでした。伐採地を好むヨタカを含め、多くは開けた環境を好む鳥でした。山浦(2009)は1970年代と1990年代との比較で、伐採地や若い林にすむ鳥が減っていることを示していますが、それに加え、さらに開けた草原などにすむ鳥も減っていて、こうした開けた場所で、大きな環境の変化が起きていると考えられます。1990年代の調査以降に、スズメが減少していることが話題になるなど、開けた場所でさらに環境の変化が起きているかもしれません。今回の調査では、そのあたりにも注目したいと思います。

逆に増えた鳥は、1970年代にはいなかった外来鳥のソウシチョウとガビチョウが記録されるようになったことを除けば、大型の魚食性の鳥の増加が目につきます。これは水質の悪化、農薬による死亡などで一時期分布が縮少していたのが、その改善により回復してきていることが大きいと

思われます。ヤイロチョウは意外ですが、実際の増加ではなく、調査により生息地が判明したのかもしれませんが。

これ以外にも河原や砂礫地の鳥が減少していること、森林性の留鳥が増加していること、農地を利用する鳥が減っていることなどが見えてきています。

それからさらに20年経とうとしている今、どんな変化がおきているでしょうか。これまでの変化に注目しつつ、変化を調べていきたいと思います。

(植田睦之:バードリサーチ)

引用文献

山浦悠一（2009）土地利用の変化は日本の鳥類の分布を左右するか？ バードリサーチニュース 6(12): 2.

<http://www.biodic.go.jp/reports/2-1/af00a.html>

http://www.biodic.go.jp/reports2/6th/6_bird/index.html

表2 過去の繁殖分布調査で増えた鳥と減った鳥の上位10種

減った鳥 種名	メッシュ数		減少率*	増えた鳥 種名	メッシュ数		増加率*
	1970	1990			1970	1990	
1 ウズラ	46	5	-0.89	ソウシチョウ	0	57	
2 チゴモズ	48	10	-0.79	ガビチョウ	0	21	
3 アカモズ	99	21	-0.79	カワウ	5	62	11.40
4 シマアオジ	52	15	-0.71	アオサギ	69	406	4.88
5 ヒクイナ	159	47	-0.70	ヤイロチョウ	5	29	4.80
6 ハリオアマツバメ	129	43	-0.67	ヒメアマツバメ	11	36	2.27
7 ヨタカ	290	124	-0.57	ダイサギ	45	147	2.27
8 タマシギ	79	37	-0.53	オオセグロカモメ	18	55	2.06
9 オオコノハズク	22	11	-0.50	チョウゲンボウ	22	53	1.41
10 サメビタキ	44	24	-0.45	クロジ	55	109	0.98

* 1970年代と1990年代のメッシュ数の差を1970年代のメッシュ数で割った値

海外でも行なわれている 繁殖分布調査

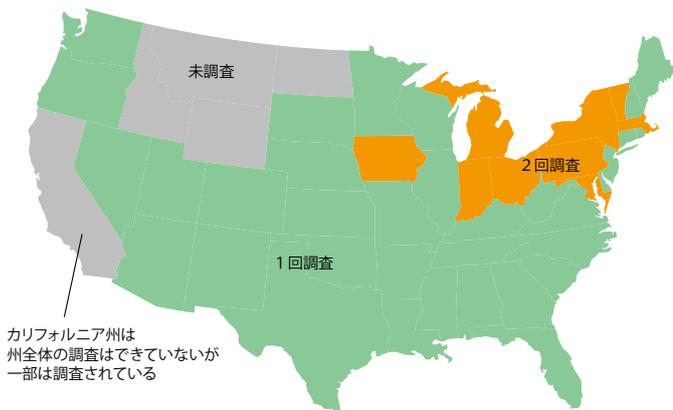
欧米でも繁殖分布調査が行なわれています。国土面積の広いアメリカやユーロ圏と比べると、イギリスは分布調査が進んでいて、すでに3回の調査が行なわれています。その調査スケールはなんと2km。詳細な分布図から鳥の分布の変化が明らかにされています。



アカアシギ：藤井 薫

「鳥の調査」というとイギリスとアメリカが進んでいて、日本は遅れていることが多いのですが、こと「繁殖分布調査」について言うと、そうではありません。

実はアメリカよりも日本の方が進んでいるのです。アメリカは国土が広いという大きなハンデがあるので、それほど威張れたことではないのかもしれませんが、けれども、すでに日本では2回の調査を行なっていますが、アメリカは東海岸の州を除く多くの州では未だに1回しか調査を行なえておらず、西部には5つの未調査の州もあります。

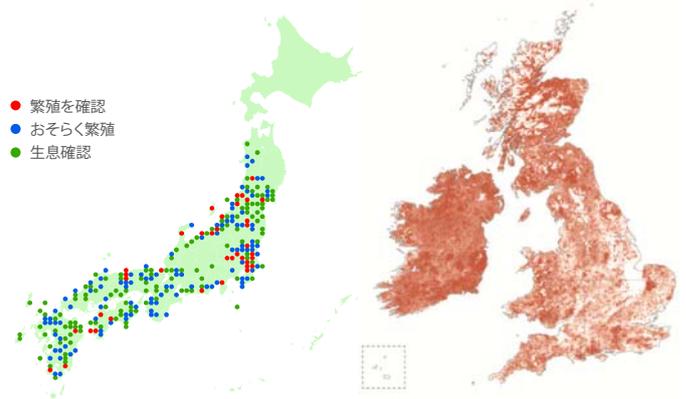


<http://www.pwrc.usgs.gov/bba/index.cfm>

イギリスの Bird Atlas プロジェクト

ユーロ圏も同様で、2017年の完成を目指して、現在2回目の繁殖分布調査が行なわれているところです。しかし、イギリスは違います。すでに3回の調査が実施されているのです。最後の調査は2007年から2011年にかけて。その前に1988年から1991年と1968年から1972年に調査が行なわれていて、日本よりすこし先行しています。

さらにすごいのが、分布図のメッシュのサイズ。日本は20kmメッシュで分布図が描かれていますが、イギリスでは

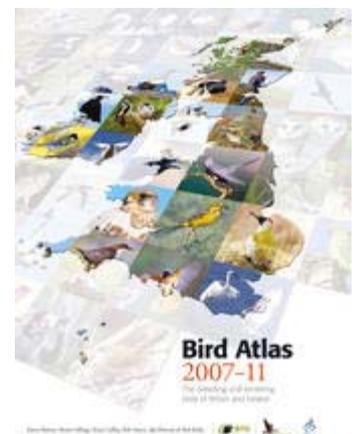


日本のサシバの分布図（左）とイギリスのヒガラの分布図（右）

2回目までの調査でも10kmメッシュと、日本の4倍の細かさです。さらに3回目の調査は、なんと2kmメッシュ。繁殖期と越冬期にそれぞれ2回、1-2時間程度の現地調査をするとともに、アンケート調査で生息種の記録をあつめています。

これだけ細かく調査しているだけに、その分布図も、ただただ美しい。生データを地図上にそのまま表示しているのではなく、周囲10kmの記録数の平均値を示していることで、分布の境界が滑らかなになり、こんなに美しくなるのです。しかし、それ

ができるのも細かいデータがあればこそですね。うらやましい。この詳細な分布図は解説とともに「Bird Atlas 2007-11」として出版されています。





減少しているコミミズク（藤井薫），シメおよびコガラ（小松周一）

この調査では、約 300 種の分布が明らかになってい
ます。そのうち、37%の種は分布が縮小していて、38%は分
布が拡大しています。特に分布の縮小が顕著なのは、日
本と同様、開けた環境に生息する鳥のようで、コミミズクの
繁殖分布が半分になってしまったそうです。また、アカア
シシギやダイシャクシギなどのシギ類の分布も大きく減少
しているということです。森の鳥にもいくつか分布が縮小し
ている鳥がいます。シメ、アメリカムシクイ、コガラなどがそ
れにあたるそうです。日本でのシメやコガラの動向はどの
なのでしょうね。

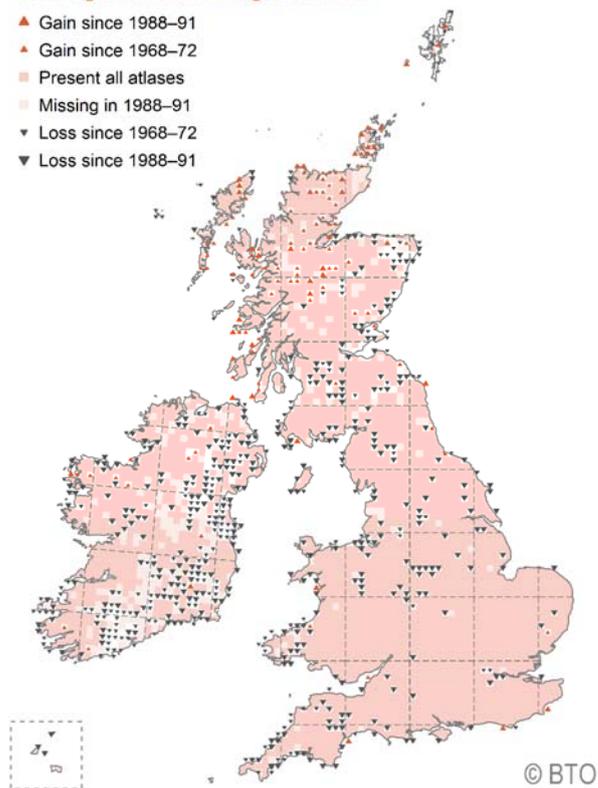
また、南で分布が縮小し、北で分布が拡大している種も
カッコウなど 13 種いるそうです。日本の場合は、南で縮小
はしていないと思いますが、メジロやヒヨドリ、ヤマガラなど
は北へ分布を拡大しているのではないかと思います。イ
ギリスの結果を参考にしながら、今回の繁殖分布調査で
は、いろいろなことを明らかにしていきたいと思います。

Bird Atlas のページ

<http://www.bto.org/volunteer-surveys/birdatlas>

Breeding Distribution Changes all atlases

- ▲ Gain since 1988-91
- ▲ Gain since 1968-72
- Present all atlases
- Missing in 1988-91
- ▼ Loss since 1968-72
- ▼ Loss since 1988-91



カッコウの分布の変化。▼は分布の減少，▲は拡大を示す

まもなく調査地の登録がはじまります

現地調査を行なう調査ルートの調査者登録がまもなく開始されます。

夏前のスタートを目指して、現在登録用の WEB サイトを構築中です。開始前には、参加登録いただいた皆様にはメールでご連絡いたします。参加登録がまだの方は、以下のページより、ぜひ登録ください

<http://www.bird-atlas.jp/volunteer.html>

全国鳥類繁殖分布調査ニュースレター 創刊号

2015年6月1日 発行 編集:植田睦之, 尾中 潔, 新井実保子

© バードリサーチ・日本野鳥の会・日本自然保護協会・日本鳥類標識協会・環境省生物多様性センター

<http://www.bird-atlas.jp>